

保育者養成現場における音楽指導

～その実践と効果および提言～

なり た まこと おおすぎみつ え からさきもも こ さかい あ や
成田 眞 大杉光恵 柄崎桃子 酒井亜弥
た なかあき こ はらだ ゆかり まつもとやすこ わたなべ あや
田中明子 原田ゆかり 松本康子 渡邊 史

〈要 旨〉

保育者養成機関における「音楽」授業の展開について。一保育現場および養成現場の理想と現実一をテーマとする。教育対象者である学生たちの実情をふまえた上で、2006～09年度の4年間に「田園調布学園大学人間福祉学部子ども家庭福祉学科」において展開してきた「音楽」授業の目標とカリキュラムの内容を開示し、解説する。同時に、あらまほしい「保育者にとっての音楽」「音楽教育の理想」について考察し、保育者養成機関が意識的、あるいは無意識的に抱えている様々な問題点と、より効果的かつ発展的な音楽授業にむけての展望について論述・提言する。

〈キーワード〉

保育者養成 音楽教育 音楽スキル ピアノ指導 声楽指導 演奏 表現 人間的魅力

I はじめに

保育現場において、「音楽」は様々な形で活用されている。

保育現場での1日を振り返ってみても、朝の挨拶、朝礼、体操、遊び、片付け、お弁当、午睡、目覚め、帰りの挨拶など、音楽の活用される場を数え上げるのは容易い。その他、行事としての「音楽会」「お遊戯会」「運動会」、または、リトミックや音感教育等の「教育活動」、英語その他語学習得のために音楽を用いている場合も含め、保育現場での生活は常に多種多様な音楽に彩られていると言える。

このように「保育現場における音楽の必要性」は、あらためて指摘するまでもないことから、当然、保育者を目指すものたちにとって「音楽」は「必修のカリキュラム」となっている。

現在、一部の音楽大学における独立した学科および専攻、たとえば私立国立音楽大学音楽学部音楽教育科幼児教育専攻のようなコース以外では、入学試験に、ピアノや歌、

あるいはその他の楽器など「音楽的素養の審査」は課されていない。したがって、保育者養成課程を擁する大学、短期大学、専門学校に入学してくる学生には「専門的な音楽教育」を受けたことがある者はきわめて少ないと言わざるをえない。

しかし前述したように、保育現場において「音楽」の存在は欠くべからざるものであり、養成課程において「音楽」素養の習得は必須である。

現在、我々は、「田園調布学園大学人間福祉学部」の保育者養成課程、「子ども家庭福祉学科」（以下、当大学と記す）において「音楽Ⅰ」（必修）の授業を受け持っている。これまで（2006～09年度）に入学した学生の、個人的音楽素養の有無を記名式アンケートによって調査したところ、「音楽Ⅰ」履修学生総数409名中、個人的に音楽素養を有していると回答したものは83名、少しでも「楽譜が読める」と回答した者は152名であり、当大学の「音楽」授業が、「超初心者向け」のものにならざるを得ないことが我々の共通の認識である。

2006年度からの4年間、彼ら「音楽初心者学生たち」の教育に携わる上で、我々は様々な問題、課題に直面してきた。それらのいくつかは、そのまま実際に保育現場が抱える課題、あるいは間接的にそれに繋がるものではないかと考えている。また同時に、学生たちが受けてきた学校教育や家庭を含めた生育・保育環境に拠るところが少なくないとも考えている。

この4年間の「音楽」の授業運営において生じたさまざまな問題・課題を整理し、これらの問題や課題の解決にあたって我々が考察したこと、具体的な解決策や目指すべき目標などをここにまとめ、論じ、いくつかの提言を試みたい。

Ⅱ 保育者にとっての「音楽」とは

保育現場における「音楽」の担う役割は、非常に多面的である。

まず重要な一面は、「動機づけ」つまり、合図・号令としての役割であり、まだ言語的能力の未発達な者たちへの「効果的動機づけ」として、生活のメリハリをつけるために用いられている。これらの多くは「生活の歌」のようにカテゴライズされ、「あいさつ、食事、午睡、片付け、おかえり」等、様々な場に応じた曲が用意されている。これらは全国の保育現場で継続的に共通のものが用いられている傾向にあり、平易な旋律と歌詞によって、すぐに覚えられるようなものが多い。または外国の小品からメロディを借りてきたものもあり、先人の工夫が感じられる。

つぎに、「お遊戯」など、音楽の中でも主にリズム要素を用いて身体動作を行うものである。軽快なリズムによる活発な運動や、特定の目的に合わせた動作を効果的に行うための音楽、たとえば行進用の「マーチ、スキップ、ツーステップ、駆け足、あるいは持

続性のあるゆっくりした運動（ストレッチやヨガ風の動き）」にも、音楽の使用は一定の効果をもたらす。

また、叙情的なメロディによるある種の雰囲気作り、精神の鎮静化にも音楽は一役買うことができる。午睡のための音楽、食事前の瞑想、宗教系の場では祈りの時間などが例として挙げられる。

「歌」の持つ役割も大きい。歌詞を通して、子どもの言語的発達面で大きな効果が期待できる。たとえば「語彙の増加」「正しい文法の習慣化」「情操の育成」についてであるが、特に語彙と文法の面では日常では用いない美しい言葉（雅語）や、助詞の自然な使い方を身につけることなどに有効である。

情操面では、季節感や自然現象をあらわす言葉、擬態語、擬声語、様々な感情、あるいはメロディと相まった、言葉で表現できない雰囲気、喜怒哀楽、漠然とした寂寥感までも、音楽によって表すことが可能である。

また、流行歌や人気テレビ番組の曲を取り入れることで、既存の文化、現代世相や流行を共有し、連帯感を確認することもできる。

以上のように、音楽の持つ多様さを保育者は自在に取り出して見せ、それらの魅力子どもたちの目に、つまびらかにしていくことが求められる。しかし、ひとつ間違えば、それら「音楽」は、効果を発揮するどころか、単なる「騒音」や、「勘違いの塊」になってしまう危険をはらんでいるとも言える。

保育者は、音楽の持つ多面的な魅力と効果を熟知し、自らの知識と技術、そして美意識をもってそれらを整理し、前述したようなTPOにあわせてスムーズに取り出せるスキルを保持していることが必要であるが、これは音楽に限らず、「スポーツ、絵画、工作、朗読、遊び」等のすべてに等しく言えることだろう。

保育者とは子どもが保護者以外に初めて出会う「社会の代表」である。したがって、子どもにとって保育者は常に「手本」であるべきで、すべてに「当たり前」に秀でていくことが求められる。音楽であれば、子どもたちは、ピアノの鍵盤を走る先生の指の動きに目を奪われ、躍動的なリズムに心踊り、歌声は澄んで耳に残る。そのような保育者の一挙手一投足に子どもたちは憧れ、圧倒的な能力を持った「大人」に対して、ある種の畏怖にも似た敬意を覚えるのではないだろうか。

しばしば、「保育者も子どもと一緒に楽しみつつ」「子どもを楽しませる」ことが、保育現場での目標として掲げられているのを目にする。しかし本来保育者とは、「大人として」ひいては「人間そのもの」として認知され、尊敬されること、子どもたちを「喜びをもって驚かせる＝感動させる」、そして、「感動される＝惹きつける存在である」ことこそ大切なのではなかろうか。前述したように、これらはスポーツ、絵画、工作、朗読、

遊び等「表現」の分野すべてに言えることであると思う。

Ⅲ 保育者を目指す者にとっての「音楽」とは

1. 指導対象学生の状況 —授業内アンケート調査による—

同大学「西洋の文化（音楽概論）」（半期・選択科目 / 授業担当教員：成田眞）の授業内で、あるアンケートを行った。

項目は、「音楽の授業は好きか、それはなぜか」「印象的な音楽体験についての記述」など8項目。その中で「音楽の授業は好き」と答えた者、「音楽の授業は嫌い」と答えた者たちの、その感情を持つに至ったと思われる「印象的な音楽体験」を自由記述として挙げさせたところ、以下のような声があった。

〈音楽の授業は好き〉

- * 先生や友人に（歌や楽器演奏を）褒められたことがある。
- * 発表会、合唱コンクールなどで、皆で力をあわせて賞を取ることができた。
- * 歌をうたう、楽器を演奏することに小さい時からなじみがあり、好きだった。

〈音楽の授業は嫌い〉

- * 学校の音楽の先生が嫌だった。
- * 一生懸命やった演奏を仲間や先生に笑われた。
- * 楽譜を読むことができず、授業についていけなくなった。
- * 音痴だった。
- * 楽器が上達しなかった。

アンケート対象者たちの多くは大学1年生（18歳）であることから、これらの感情は大学進学以前の時期に芽生えており、音楽を自発的・積極的に楽しむことができる感性の育成は、人生の早期に集中して行われ、その後、その人間の感性や嗜好の方向づけに大きな影響をもたらしていることがうかがえる。家庭環境・教育環境を含めた生活環境、そこで受けた音楽教育および音楽体験の差が、後々、個々の音楽に対する感情や態度に表れるのは否めないようだ。このことから、保育対象者に対する保育者が、すべからず「ふさわしい感性と美意識」そして「美意識に反しない音楽性」「教え導くに適したスキル」を保持していることは、「mustである」と言わざるをえない。

以下に、「保育者を目指す」学生たちに見られた習慣的・身体的な特徴例を挙げる。こ

れは2006～09年度「音楽Ⅰ」履修学生、409名をトータルに観察し、授業内に与えた課題に学生が取り組む際、我々が気づいた事柄に拠っている。いずれも「状態」についての「印象」であり、学術的研究ルールに従った観察ではないが、音楽のプロフェッショナルから見た、学生たちに散見される不具合の状態として参考に供したい。

〈身体機能〉

* 心肺機能が低い？

息がしっかり吸えない・吐けない。呼吸が浅い。鼻からの呼吸ではない、口呼吸の者が散見。

* 姿勢の悪さ、筋力不足？

一定時間、真っ直ぐ美しく立ってられない、座ってられない。

片足で立てない。キャッチボールができない。美しく歩けない。内股、O脚。

リズムを正しく叩けない。

* 顔面周辺筋肉・骨格の未発達？

顎の未発達。口角がゆるく、下がる。口が半開き。顎の稼動域が小さい。

表情筋の未発達。言葉が不明瞭。

〈生活習慣・対人態度〉

* 言語習慣の低さ？

慢性的な音声的だらし無さ。必要な情報を提供できない（聴こえない・聞き取れない）。

TPOを認識して話せない（声のヴォリューム・敬語・話し方等）。

* 対象意識の不足？

対している人の顔・目を真っ直ぐ見られない。何か事を起こすときに、視線が泳ぐ。

2. 保育者養成機関における「音楽」の指導目標について

「音楽表現をする」ことは「非日常」である。普通に活動（飲み・食べ・眠り・排泄し・生活する）している時にはおよそ必要のない筋肉と精神力を積極的に働かさざるを得ず、もちろんこれらはⅡで前述したように、スポーツ、美術など、すべての表現活動においても同様である。

彼らの短く浅い人生経験の中で、「こうあらねばならない」「そうでなくては美しくない」と、誰かに指摘され、矯正を求められることなど、無きに等しいことだろう。問答無用、まず「型」から… などという、一種「厳しい状況」に身を置いたことなど皆無だと思われる。

発声、楽器の演奏において最も必要なことは、端的に言えば「整理されたエネルギーのコンスタントかつ意思的な発信」である。たとえば声を出して語り・歌うにあたっては、

適正なヴォリューム・適正な母音・適正な子音・適正な言語表現が不可欠であり、また、しばしば特殊な表現下においては、それら適正さの瞬間的な判断と行動が必要になる。そしてその声を「情報」「物質」として受け取る側の状況を的確に認識し、臨機応変に対応し続けることが求められる。

上記したような、学生たちの身体的・習慣的欠点・弱点は、主に「エネルギーの不足とコントロールの欠如」から生じるものではないかと、我々は認識している。ここでの「エネルギー」とは、単なる生命活動や熱量のことではなく、あくまで意思的な行動のことであるから、個人の資質に大きく関わっていることは言うまでもない。つまりこのような音楽をはじめとする表現活動を行うにあたって「向き、不向き」は、残念ながら確実にある。「音楽的な才能・能力」と称されるものには様々な面があるが、その一つは「エネルギーを自分で生産し、コントロールして自在に放出することができる」という能力である。このような「身体にエネルギーが充実し、自己コントロールに優れた者」の姿は、すなわち「魅力的な人間」像に重なりはしないだろうか。

Ⅱで述べたように、保育者は保育対象である子どもたちにとって「人間代表」であってほしいと、我々は考えている。つまり我々は、音楽という表現方法を通して、学生たちに「魅力的でエネルギーある人間」であること、およびそのような人間に育つための方法を伝達していきたいと考えているのである。

(1) 「音楽」授業で習得を求めていること ―音楽担当教員の共通認識

具体的な指導方法等についてはⅣ以降に述べるとして、保育者養成にあたって我々が必要と考え、「音楽」授業で習得を求めることは、以下の通りである。

① 自分が楽しむための音楽から、目的ある音楽への視点の転換

* 保育者は演奏家であり、指導者でなくてはならない。それゆえ、知識と技術習得は必要不可欠。

② 身体機能の向上

* 「音楽的正しさ」をこなすことができる身体能力を身につける。

- ・呼吸器能力の増進。
- ・楽器演奏のために必要な筋肉組織の活性化。

③ 精神力・集中力の向上

* 技術習得、鍛錬に必要な時間、反復の過程を乗り越えられる集中力の持続。

* 自己を振り返り、評価し、問題を克服しようとすることができる精神力と客観性。

④ 「正しさ」への飽くなき前進

* 音楽という分野で必要な知識の習得・増強。

- ・楽譜に現れる記号・ルール・楽語などの音楽一般知識。
- ・楽曲に求められる適正なテンポ、曲調、求められるメッセージ（歌詞）の理解。規定された理論とルールに則り、それを遵守しようとする姿勢。
- ・楽譜に指定された条件はあくまで最低ラインに過ぎず、求められるのはそれ以上の成果であることへの自覚。

⑤ 「学ぶ」という姿勢の保持

* 目的を持ち、それに向かって努力できる姿勢。

- ・自己確認の習慣化。

* 基本的な礼儀作法。

- ・オフィシャルな場での身の処し方。

* TPOをわきまえた身だしなみ。

- ・人前に出て見苦しくない身だしなみ。
- ・音楽活動に有効な服装、および髪型・爪等の手入れ。

(2) 「音楽」授業に対する保育指導教員からの提言と、音楽担当教員の回答

我々音楽担当教員は、以上を共通の認識として、授業カリキュラムを組み、指導にあたっているが、しかし、いくつかの大きな疑問にも対峙させられている。

上記で述べた④については、これは義務教育期間中に習得されているはずのものではないのか（「小学校・中学校新学習指導要領」は、この習得を規定している。）。

また、⑤についても、この種のことは本来、家庭教育・学校教育の中で培われるべきものではないだろうか。

上記してきたように、「音楽超初心者」にして「基本的身体能力・知識が不十分」な学生の多数在籍する授業において、本来ならば長い時間をかけて会得していくべきものを、限られた短期間で習得させ、一定の効果を望むのは、非常な困難と言わざるをえない。「単なる付け焼き刃」になる危険性も多分にある。多くの保育者養成機関においても、我々と同様の問題や悩みを抱えているのではないだろうか。

実際の保育者養成機関現場において、これらの「問題点」や「実情」に、真正面から向き合い、問題視し克服していこうという姿勢は、残念ながら少ないように思われてならない。それが、IIで述べたような「楽しむことを目標」とした認識、「楽しい音楽・楽しむ音楽」が一番、それでいい、それで十分、という、認識を生み出しているのではないか。もしかするとそれは、「音楽」のみならず、「保育者養成」にあたる指導層の認識の甘さによるのではないだろうか。さらに一步踏み込んで類推すると、指導者たち自身が、自分たちが取り組まなかった、できなかった、しなかったことから、

「ほどほどでいい」という一種の諦念に似た免罪符のような認識を持ち、そのような価値観に基づいて育てられた者がまた次の世代を育て… という悪循環に陥っているという、哀しい考えに至ってしまう。このような「暗黙の原罪否定」の中からは、めったなことでは「正しいもの、いいもの」は生まれまいだろう。

我々がこのように考えたきっかけのひとつに、ベテラン保育者にして著名な保育指導教員であるA氏から、我々の授業への提言があった。その提言に対する回答は、2007年当大学で求められ、提出した『授業報告書』に記載したので、以下にそれを一部転載する（2007年『田園調布学園大学子ども家庭福祉学科「音楽Ⅰ」授業報告書』より）。

〈保育指導教員A氏からの提言〉

学生が楽しく演奏するのは無理にしても、「音楽ってタイヘンなんだ」という考えを、授業において学生に持たせないでほしい。「音楽って楽しいなあ」と思わせなくてはならない。

〈音楽担当教員の回答〉

このご意見に関しては、失礼ながら、断固反対の立場をとらざるをえない。

音楽とは「タイヘン」なのである！！

これが、「シロウトさんが手遊びに興味として関わる音楽」であれば楽しいことに、なんら異存はない。しかしこの授業を受けている学生たちは、「保育士」を目指しているのであり、保育士とはプロフェッショナルな職業である。保育の場において保育者は「子どもたちに音楽を楽しませる」ことをしなくてはならない。自分が楽しんでいる場合ではない。

「まず保育者自身が楽しんでいるサマを子どもに見せて…」とおっしゃるか。好きでも得意でもないピアノをヨタヨタ弾き、歌いたくもない童謡やアニメソングをいい加減な音程と、不明瞭かつ不正確な言葉でがなり、それがため音声障害を起こしもする。これのいったい、なにが楽しかろう。

プロフェッショナルは、シロウトを「楽しませ」なくてはいけないのだ。そしてあたかも、自らが「楽しんで」いるように「見せ」る。つらいこともある、思い通りにいかないこともある、それら全てを隠し、笑顔で「場を成立」させる。これが「プロフェッショナルの仕事」である。

彼らは、学生たちは、「それ」を知らなければならない。そして、いかなる手段をもってしても『力ある声・正しい音程・明確にして柔軟なリズム・美しくかつ明瞭な言葉・

正しく広範な知識・様々な楽器を難なく弾きこなす技術』すべてを身につけなくてはならない。これらを会得してはじめて、聴くものの心を動かし、楽しませることができるのだ。

『できたつもり、なんとなく、ノリで、適当に』…そのいい加減さは、音楽の命取りである。その『いい加減さ』が、無垢な子どもたちから音感を、美しい日本語を、リズム感を奪っている。

9年間の義務教育で、音楽の「基礎だけ」でも習得できないのはなぜだろうか。今から30年ほど前の指導要領によれば、小学校のうちに基本的な読譜、および記譜能力を身につけさせるのが適当とされている。しかし昭和50年代から、指導要領自体が「日和って」きたのである。いわゆる「音楽は楽しめばいい」という方向にだ。そしてそれが明文化されたのは、悪名高き「ゆとり教育」がスタートした当時、10年ほど前からの指導要領である。

全国を見渡して、音楽専科の教師がいる小学校は数分の一である。もちろんそれも原因ではあろう。また、授業数削減に伴い、所詮は「添え物」である音楽の時間が真っ先に削られたのも原因の1つであろう。しかしもっとも大きな原因は、教師にその能力が欠けている、ということではあるまいか。

音楽は楽しむものである。しかし、なにかを楽しむためには、その「楽しみ方」を教えてやらなくてはならない。例えば森林の散策や、バードウォッチングなどは、生物の種類や生態や歴史を知ればさらに楽しい。囲碁や将棋、トランプ、麻雀…ゲームはルールを知るから楽しめる。スポーツも然り。しかしこれらは、生きていくために必要な知識ではない。そのような知識を「教養」と呼ぶ。

教養があれば文化的な生活はさらに豊かになり、楽しめることもたくさんある。現代の日本人にとり、「教養」の要素が少なくなっているはいはしまいか。それはいったい、誰の功罪だろうか。

教養のない、能力のない先人から、後進に知識や教養を与えてやることはできない。文化的な「教養」を伝えていこうとする場合、能力ある指導者が不可欠であろう。保育者にしても同様である。

自身が「知らない」もの、「できない」ものは教えられない。教えられるわけがない。しかし、できなくてはいけないのだ。『必ず!』

それらのスキルを身につけ、教養の一つとして学生たちに与え、伝えるのが「義務」ではないだろうか。彼らは「プロフェッショナル」なのだから、当然その「義務」を負う。伝えうる情報、そしてその伝達スキルを、いかなる手段によっても身につけねばならない。

技術習得には反復に如くものなし。それら技術の習得に要するもの大半は単に「努

力」であり、またその大半は、個々の「忍耐」により培われる。こうしてみると、技術の習得とは、自分の「欠けた点」に向き合う勇氣と、その欠損を補完し、弱点を克服しようとする気概があるかどうかにかすぎない。

すべては「忍耐」、そして「気合い」であろう。音楽の技術習得に関してもまったくそれと同様である。「忍耐」すらも自らに必要な条件と納得し、習得の要件とし、ひいては「音楽の一部」として認識すべきではないだろうか。そう思えないものに…「音楽技術の習熟」に必ず付随してくる「困難と忍耐」を認め、受け入れられないものに、音楽に関わる資格はない。ましてや、音楽によって人を教え導く資格は微塵もない。困難すらも、「音楽する」喜びと思える、それこそが最も密なる音楽との関わり方である。

この「音楽Ⅰ」受講学生の中で、音楽に付随する困難と忍耐を受け入れられなかったものは、こと音楽に関して、保育者、つまり「先人」たる資質を欠いているのだ。ただ、それだけのことである。

シロウトはシロウトのままがいい。それが「普通」なのだから。現代日本における知識と教養の護り手であるべき文部科学省の、お墨付きもあるではないか。

そう、音楽は「楽しめば」良い。音楽の楽しみ、ステキさを大学内で教養として教えるためには、別の授業が必要であろう。

我々音楽教員は「プロフェッショナル」であるから、その対象とニーズに応じ、いかようにも授業を展開することができる。その授業では技術習得を目的にせず、名前は「選択授業・楽しい音楽概論」、とかいうものであればよろしかろう。鑑賞やちょっとした歌唱、楽しいアンサンブルなどを取り上げて、要するに、「シロウト向けカルチャーセンター」的なものを開講する。これはむしろ、我々にとっても責任なく、「自分の思う楽しさ」を美意識においてとり行えば良いのだから、楽なことこの上ない。簡単な話である。

しかし、残念ながら「プロフェッショナルを育成」することを目的とした「音楽Ⅰ」授業においてこれは望めない。スキルを身につけるには、「困難を忍耐と努力」をもって「自らが」「意思と力とで」乗り越えて行かねばならないのだから。

我々はこのような「プロフェッショナル」を育てる哲学に基づき、保育現場の現状、保育者養成機関の抱える問題やジレンマを視野に入れつつ、授業を展開して来た。以下に具体的な内容・方法を紹介する。

IV 「音楽」授業の進め方

指導にあたる教員は、声楽専攻者1名、ピアノ専攻者5名、コーディネーター（声楽専攻）

1名。

全員が音楽学士号取得、声楽担当者は修士号取得。豊富な経験を持ち、日本を代表する演奏家であり、個人教授をはじめ、音楽教室、専門学校、大学、民間企業等での指導歴を持つ。また、実際に保育現場および初等教育現場での演奏、指導、または保育者・教師の指導にも数多くあたっている。

1. 授業開始準備

第1回目より、順次、以下の項目を周知徹底し、年間を通じて授業内ルールとする。

〈音楽知識、ピアノ演奏、自己申告による音楽スキル・体験の確認を行い、個々のレベルチェックをし、その結果に応じた習熟度別グループ分けを行う。〉

(参考) * 2009年度「音楽I」履修者約100名中、即、授業に参加可能な音楽的素養のある学生は、2割。

* 「楽譜の読める」学生は4割、「読めない」学生は6割。

〈ピアノは年間を通じて担当制とし、マンツーマンレッスンによって個々の進度に応じた指導をする。〉

* 楽曲をレベル別に並べた「進捗表」を持たせ、レポートリー確認をひと目で行えるようにする。

* 「個人カルテ」を作成。

〈ヴォーカルはグループレッスン。個々の希望や進度、あるいは指導側の判断で個人レッスン〉

〈教材は、市販の教科書・楽譜以外に、担当教員作成の楽譜・資料を適宜配付〉

* 保育現場でしばしば使用される楽曲。

* テクニック習得のためのトレーニングプリント。

* 楽典、音楽史。

* 音楽専用ファイルを作り、確実に保存していくことを指導。

〈授業ルールの周知〉

* 健康管理

・ 風邪をひいたらマスクを着用する。

・ ピアノに触れる前には必ず手を洗う。

＊身体管理（身だしなみ）

- ・爪を切り、マニキュア、アクセサリ類（指輪・ブレスレットなど）等は禁止。
- ・ヴォーカルレッスンにあたっては動きやすくストレッチ性のある素材の服装。
- ・さらに前髪を上げ、表情筋の動きを妨げない工夫を。

＊礼儀作法

- ・レッスン室への入り方。
- ・レッスン前後の挨拶。
- ・ものの受け渡しの仕方。
- ・言葉遣い、基本的対人マナー。

学生にしばしば見られる、早急に改善が必要な問題点として、以下が挙げられる。

〈集中力の欠如〉

- ＊ひどい者は、およそ5分がやっと。
- ＊繰り返し同じことに取り組むことができない。

〈自己認識の甘さ〉

- ＊基本的な社会マナーの欠如。
- ＊体調管理ができない（睡眠不足・食生活の乱れによる体調不良）。
- ＊習い事への取り組み方が分からない（文化・芸術的体験が少ない）。
- ＊自分と真っ直ぐに向き合う時間・習慣のなさ（出来ない・知らないことに向き合えない）。

このような問題を解決に導くためには、常日頃から学生に「なんのために」「何が必要なのか」「そのためにどうするのか」、といった目的意識、計画性をもたせ、自己のレベルや客観的な認識を明確にさせることが重要である。

以下、ピアノとヴォーカルについて、各々授業計画と理念、および学生の状況なども併せて述べていく。

2. ピアノスキル

学生の年齢や就学環境的にも、大学での数年間とは、「新しいことに集中して正面から取り組める」最後の時間ではないかと思われる。しかし「ピアノ」という芸事自体が、

およそ簡単なものではなく、ある程度の反復に対する忍耐力と集中力がなければ、とうてい乗り越えられるものではない。我々ピアノ担当教員は全員が幼少時よりピアノに触れ、定期的な練習を意思的に行ってきた。そして、その困難さや煩雑さを乗り越える喜び、表現手段のひとつとしての素晴らしさを十分に理解しており、同時に、多くの人間にとって「困難さ」だけでは到底ピアノを弾く喜びや意義に到達するまで耐えることができないことも、指導経験上熟知している。つまり、ピアノ指導にあたっては、「達成感を与える」「美しさ、愉快さを感じさせる」ことを意識的に加味しながら、なによりも学生自身の「意欲を持続させながら」取り組まないと、克服することは不可能であると考えている。

このような指導にあたる上での注意点は常に心に留めながら、授業内容を進めている。以下にピアノに取り組ませるためのファーストステップをまとめ、述べていきたい。

(1) ピアノに触れる

見たことはあっても触るのは初めて、という者がほとんど。ピアノも多くの楽器と同じく、「正しい姿勢」・「型」があり、それを身につけることが上達の早道である。

① 指を動かす日常的訓練の必要性（悩と指と身体の連動）

まず10指がバラバラに動かなくてはいけない。日常生活では行われたい運動であるため、常に「意識して」取り組む必要がある。まずは末端神経の活性化。たとえば点字を読む人は恒常的に指感覚を鋭敏にする必要があることから、日々それに取り組み、慣れることで自然と指先の感覚が鋭くなっていく。ピアノも同様であり、意識的にトレーニングし、指それ自体を育てていく。例として以下を提案する。

* 指先を刺激…指先マッサージ。指番号を考えながら指先に順々に圧を加えていく。

* 2つ以上のことを同時に行う訓練…右手でページをめくりながら、左手で数を数える、など。

* 視覚と触覚の同時活性化…運指訓練をしながら周囲に目をくぼる、など。

② ピアノの前に座るときの姿勢を正しく身につける。

- a. 椅子には浅く腰をかける（深く腰かけてしまう学生が多い）。
 - ・踏ん張りを利かせ、身体の力を適性にコントロールするため。
 - ・適正な椅子の高さの調節を自分でできるように習慣づける。

- b. 胸を開き、脇を絞めすぎず楽に、肩の力は自然に抜く。

「姿勢を正しくする」こと、「堂々と振舞う」ことは、自分に一種の「自信」が備わっていないとできないことかもしれない。「余裕」をもって、適当な姿勢を「型」としてとれるようになるには相応の年月を要する。そして、「正しい姿勢」は「美しさ」に繋がることはいうまでもない。この「正しく＝美しく」姿勢を律することのできる学生が、近年少なくなっているように思われる。

たとえば、授業中などに限らず、電車などの公共機関等オフィシャルな場で「きちんと普通に座っている」ことなどだが、これは家庭教育、および幼児教育が不十分であることの弊害ではないかと懸念している。初等教育レベルでの「躰」が、ここへ来てものを言うのではないだろうか。

- c. 足および膝は自然な肩幅程度に開き、必要に応じてペダルが使えるよう、右足は少し前に置く。

左足は自分の体重を確実に支えられなくてはならない。不自然に膝をくっつけて座る、開く、足を組むなどの状態が見られる。

以上の a. b. c. 3点を踏まえて取り組めば自然と正しい「ピアノを弾く姿勢」に導かれる。ゆえに、これらを常に意識し、「身につくまで」反復することが大切である。

③ 鍵盤に親しむ

鍵盤上での右手の「一点ハ音」左手の「ハ音」の位置を正しく認識し、指で「ハ～ト」五度圏を指および手・腕・身体の実感としてつかむ感覚を身につける。

鍵盤上での「指の動き＝打鍵」の訓練には、『バーナムピアノテクニック』または『メトードローズ上巻』などが、その反復性から有効である。

打鍵が自然にできるようになると、指遣いの必要性、そして利便性に思い至るだろう。なるべく「指の返し」が少なく、いわゆる「演奏上安全な指遣い」を常識的習慣として指導していくためにも、正しい姿勢や指の構えの徹底は必要である。

次に意識すべきは指間、いわゆる水かきの部分を柔軟に広げることである。3度以上の音をつかむパッセージの反復練習が次の課題となる。

通常のピアノレッスンでは、ここから先の段階でいよいよ「楽曲」への取り組みに至るわけだが、多くの「保育者養成」を謳った授業では、年間30回程度のレッスンで、「ひととおりの楽曲レパートリー」を習得できることが求められている。これはプロフェッショナルレスナーの立場から言えば、まったく不可能であるといわざるを得ない。上記①～③の基礎的なピアノスキルを身につけるだけで、優に1年以

上は要するというを、声を大にして訴えたい。

(2) 楽曲に取り組む

① 「生活の歌」9曲 暗譜・弾き歌い

保育現場で使われる頻度の高い楽曲を9曲選択し、ファーストステップとする。通常練習の他、ノートへの写譜を通し、記譜ルールを学びながら暗譜させる。併せて教員作成の楽典プリントなども配付し、それらを参照しながら正しく美しい譜面を書くことができるようにする。

② 「レパートリー」の拡大

教科書として使用している楽曲集の中から、個人の進度と習熟度に合わせて曲を選択。なるべく現場で使える、季節や行事に沿ったものを心がけながら、レパートリーの拡大につとめている。

③ 「コード弾き」の指導

習熟レベルにもよるが、読譜が困難な者、指の動きがままならない者に対しては、「コード奏法」を積極的に採用し、コードと歌唱で楽曲を形に出来るよう指導する。

また、曲によっては楽譜記載のものより、コード展開による演奏の方がスタイリッシュであったり、時には歌いやすいことから、曲や習熟度、場に応じて実践的なアレンジ方法を教授する。

以上、我々が実践しているピアノ教授の流れを述べた。

これらのスキルを踏まえた上で、「ピアノ」の課題として「弾き歌い」を採用している。試験ではなく、あくまで「発表会」の位置づけとし、前期は、前述した「生活の歌」全9曲中から、当日担当講師がその場で一曲を指定し、暗譜にて演奏する。もちろん学生個々の進度に合わせ、その習熟度を把握した講師の判断によるものなので、めったに「立ち往生」してしまうようなものではない。

後期は、「自由曲」とし、個別レッスンの中で担当講師と相談の上、任意選択した一曲を演奏する。希望曲が本人の力量に比して難易度が高い場合、コード弾きや移調など、講師のアレンジを加えることも適宜行い、あくまで「本人の希望と意欲」を尊重した形で、演奏の成功に導く。

弾き歌いの場合、もちろん歌唱も必要になる。通常のレッスン回数と時間のみでは、「弾きながら歌う」までに各々のスキルを高めることは難しい。ピアノ、ヴォーカル、どち

らか一方ずつもままならない学生たちには至難である。

現在のところ、まずは「ピアノスキルの充実」に重点を置いて譜読みをし、ある程度ピアノが上達した者は、ピアノ担当講師の判断で、個別にヴォーカル担当講師の個人レッスンにより、歌唱声部の練習に入る。

しかし、ピアノだけでも精一杯で、ヴォーカルレッスンに至れない者がほとんどであり、「弾き歌い」のレベルとしては、なかなか高いところまで引き上げられないのが事実である。

学生たちが自分の課題を自分のものとしてとらえ、個人練習を行ってくれば、多くは解決されるのだが…週一回の「音楽授業の時だけ」が音楽に接する時間になってしまう者も多いのが現状である。

できれば、「発表会の出来・不出来」で単位認定の可否を出したいところだが、そうもいかず、「必修授業」として、たとえば技術やモチベーションが低い学生にも、単位認定をせざるを得ないのが、正直、心苦しい。

ピアノに限ったことではないが、物事の成功例、その到達点、理想の形などを「知らない」ということが、多くの場合、取り組み、および上達の妨げになっているように思われる。たとえば山に登る場合、いま自分が何合目にいるのか認識することは励みになるし、頂上に到達する素晴らしさや期待感を、情報としてだけででも知っていることは、登山への憧れを掻き立て、困難を克服するための良薬となるのではないだろうか。

そもそも、多くの学生たちには「音楽」や「演奏」への憧れが欠如しているのではないだろうか、とすら思う時がある。これは彼らの生育環境において、残念ながら、そのような感動や憧れの気持ちを喚起させる機会に恵まれなかったということかもしれない。これらの「生育環境」の中にももちろん、「保育現場」が含まれる事は言うまでもない。たまたま出会ってしまった保育者の、不十分な音楽的素養だけで無理やり演奏される、しばしば暴力的ですらあるピアノの音を聞いて、「素敵だなあ」「あんな風に弾いてみたいなあ」と思うとは考えられない。言うまでもなく「型」の習得は多くの芸事に必須な要素であるが、手本の「模倣」という行為は、上達・熟達の最も有効な一手段である。「知らない」ものを、さあ形にして見せなさい、というのは、あまりに無謀である。

実際、我々は、保育現場のいくつかで、どんな旋律のときも「ド・ミ・ソ」の連打だけで伴奏づけをする、という、恐ろしい場面に遭遇している。そしてそのような非音楽的な場は… けて少なくないように思われる。

授業内でちらほら耳にする言葉や態度からして、学生たちの「音楽」に対する隔絶感は大い。たとえば、指導教員の模範演奏は「自分たちとは別のもの、まったく違う次元のもの」「自分の知らないお芸術」であるかのように捉えられてしまう。あるいは、「ピアノ」や「音楽」というものへのある種の偏見、言い換えれば恐れを抱いているかのよ

うにさえ見受けられる。

音楽という表現活動には、ただ感心するだけでなく、Ⅲで述べたような「自分が意思的に取り組み」「体現してみせる」という自主的な感性こそが求められているのだが…。子どもたちの前で保育者たる自分がどのようなことをするべきか、何を求められているのかという目標・ヴィジョン、ひいては理想像が明確でない、また、明確にしにくいということが、学生たちの上達を阻む大きな理由のひとつとして挙げられるのではなからうか。

これは堂々巡りを招いているのかもしれない。「理想的な保育者像を知らない」→「自分に置き換えられない」→「憧れ・期待」という能動的な原動力を得られない…。そして、また今日も、「いい加減なスキルの付け焼刃保育者」が量産されていってしまう。

もちろん我々指導者がどんなに足掻いても、最後に帰せられる責任は、当事者たる学生自身の美意識、自助努力の域にあるのだが…。指導にあたるもの、先人たる大人たち、現場を支える者たちが、後進たちに、自ら「美しい規範」を示して見せることが、将来の現場を変えることに繋がるであろうことを、我々は肝に銘じるべきではないだろうか。

当事者としての学生は、反復・強制を面倒がらず、できないことを諦めず、手を抜かないことを、厳しく自らに課さなくてはならない。およそ、何かを成し遂げるには、一定のアナログ的作業・努力を免れることはできないのだ。一方、指導者は、より有効な練習方法、上達のための道を、明確に提示しつづけなくてはならない。このような「師弟関係」は、両者の間に信頼、また先生への絶対的な尊敬がなくては成立し得ないことである。

そのような「オーダーメイド的レッスン」を、確実な効果を求めて行っていくためには、時間はいくらあっても足りない。なぜなら「そこに終わりが無い」からである。保育者養成現場、教育現場にいま最も必要なもの、それは「時間」である。弱点克服のための単純な反復、勘を鈍らせないための、ライフワークとしての練習といった、一定の持続的作業に没頭できる「時間」。これこそ欠くべからざるべきものである。

現在、我々は、「音楽Ⅰ」は基礎を徹底するための時間と位置づけており、つづく「音楽Ⅱ」の選択履修を視野に入れながら、学生たちに指導を行っている。こうして、まる2年をかけて、ようやく学生達が「音楽の入り口」（楽しさや達成感の片鱗も含めて）に立てるようになってきたことを実感している。

ピアノでも手拍子でも、リズム、たとえば「付点」を体現できない学生が、毎年20%以上もいる。身体の締まりやメリハリ、いわゆる「芯」が、それらの学生からは感じられず、そのような身体からは、やはり「そのような」貧弱なピアノの音色しか生まれてこない。Ⅲで述べたように、「音楽」とはすなわち、「自己の持つエネルギー及びその可能性の現れ」

である。だからこそ、自我や意志が不十分な者が、「音楽」という手段のみならずとも、「表現」という「エネルギーの発露」に至らないのも、仕方がないことなのかもしれない。

だとしたら逆に、音楽に正面から向き合うことで、自己の弱点・欠点と向き合い、自己実現、発展のきっかけになりはしないかと、我々は常に願い、指導にあたっている。

3. ヴォーカルスキル

「声」は、人間の最も身近な表現手段であり、喜怒哀楽といった基本的感情だけでなく、色、形、香り、味、肌触りなど、五感で味わえるものを、「空間」に描くことができる。もちろんそれには、ある程度の訓練と知識、そしてなによりも、音として、明確な情報としての「声を選ぶ」ための意識が必要であることは言うまでもない。

どんな声を出そうか、声をどのように利用しようか、この場にどんな声が必要か、その質は、色は、ヴォリュームは…と、選べることは、実は「生物」というレベルで必要なスキルでもある。たとえば犬の鳴き声に種類があり、それぞれに表す感情があることを、思い出されたい。人間である我々も、その場その時に応じて、もっとも効果的にして必要な声を、適宜発することができなければならない。ことに、保育現場における保育者は、正確な情報を伝達する責を負ったリーダーであり、同時に多彩なエンターテイナーでなければならないとしたら、なおのことである。

しかし残念ながら、保育者を目指している学生たちにとって声とは、単なる「自分の意志伝達ツール」という最低限のものに過ぎない。これでは、乳がほしい暑い寒いと訴えるだけの赤ん坊同然である。そして、あまりにも声が身近すぎるゆえか、その質を選ぶどころか、それ自体のコントロールすらままならず、しばしば、だらしのない、本能のままの「騒音」同様にすらなる危険性をはらんでいる。彼らは自分たちの髪型ほどにも、声を整えようなどとは思っていない。というよりむしろ、「整えられるもの」だという意識がそもそも欠如しているのかもしれない。声が自己表現の重要なツールであるということを、多くの学生は、いや、多くの日本人は知らないのかもしれない。

ヴォーカル授業にあたり、歌以前にまず我々は、彼らに対し「声」というものへの徹底した意識改革を施し、自己表現ツールとしての、声の明確な位置づけを行っている。

Ⅲで述べたように、表現としての発声・発語において最も必要なことは、「整理されたエネルギーのコンスタントかつ意思的な発信」である。そのためにはまず、エネルギー生産装置たる身体の活性化と恒常的な活動、および適正なメンテナンスが不可欠である。

自己の身体を「発声・発語のための優秀な機関」として律することのできる意識、そしてさらには、「そう思い、取り組むことのできる自発的な意識」が必要になるが、多くの学生にとって、前述したように、声はおよそ具体的なものではなく、よって、「自己の

発する音＝声」になんら疑問を持ったことがなく、すなわち、問題意識もなく… それでは向上心を持ってと言われても、なんのこともやら理解もできないであろう。

そこで基本的身体能力活性化の必要性に気づかせるために、あえて「発音・発語機関としての性能の悪さ、自分のダメっぷり」に直面させる、という「荒療治」を試みてきた。多くの学生はここに至ってようやく「声」というものをある種の「物質」として認識し、その物質を生み出すためには自分が「発動機」にならなくてはいけないことを知り、発動させるには、きっかけとなる自分の意思が何より必要… ということに思い至る。

しかしそこに気づいたとしても、「出来る・出来ない」は個人の資質による。どうしてもエネルギーとしての声を発信できない人もいる。つまり、人間としてのある種のエネルギー発現が不得手な人である。このような能力が保育者の資質として求められていることを前提に考えれば、このタイプの人、保育者としての資質に欠ける部分がある、ということになる。しかし我々は彼らの生来の資質までを云々する立場ではない。いつか彼らが自分の意思でその障壁を乗り越えたいと願った時、惜しまず助力の手を差し伸べられるよう、常に扉を開いておくだけだ。

声は、あまりにその身体、そして精神と密接に関わっているがゆえに、ヴォーカル授業は、自己否定・肯定、自己確認の繰り返しになる。そこで当授業では、歌をうたう以前に、呼吸・ストレッチ・歩行・発声・発音・発語といった細かい目標を設定し、ひとつひとつに挑戦・克服していくようにカリキュラムを組んでいる。

以下に、1年間の大きな流れを提示する。

(1) 授業内ルールの確認

- ① レッスン開始・終了の礼を徹底する。
- ② ストレッチ・ウォーキング等を行うため、身体を動かしやすい伸縮性のある服装で臨む。床で滑りにくいような靴・ダンスシューズなどを用意する。
- ③ 健康面（参照Ⅱ）

(2) 授業開始

力ある豊かな声のための基礎トレーニングは、授業時間以外の日常生活でも意識的に行い、「ライフワーク」として位置づける。

身体筋肉組織図を参照しながら、各部分の骨格・筋肉のレベルから自己を意識し、客観視していく。

① 身体をほぐし、あたためるストレッチ

関節や筋肉のつき方を知識として確認し、無理なく柔軟な身体作りを心がける。

② 正しく美しい立ち方を身につける。

・ガニ股 ・内股 ・O脚 ・猫背 ・アゴ出し ・首のゆがみ、曲がり ・肩の高さ違い ・無意識におこる手足のブラブラ ・意図していない視線の泳ぎ
これらに対しては、鏡を用い、全身をチェックすることで弱点を認識、改善を目指す。

③ 腹式呼吸 … 鼻から吸い、止め、口からゆっくり吐く。

* 身体各部分を意識し、美しく正しい姿勢に身体を律しながら…。

* リズムを取り入れた呼吸トレーニング

・ 4拍子で完全に息を吐ききり、その状態で自然に入ってくる素早い吸気を身体で覚える。

* ウォーキングを組み合わせ、息を長く持続させる。

・ カカトからゆっくりと足を床に付け、体重移動をスムーズに行うことで、美しい歩行を意識。

・ 息を8拍間吐きながらリズム良く歩き、呼吸と身体の律動をシンクロさせる。

・ さらに声を出しながら同様に歩行。息の長さを目指し、なにより「ガマン」をしながら…！

④ 正しく美しい発音・発語

「言葉」についての意識を鋭敏にする。

・ 日本語の特性を学ぶ（母音と子音、語頭）。

・ 情報としての声・言葉の意識と理解、それらの発信。

・ 声を投げ掛ける目的・到達点の意識をもつ。

* 「あ・い・う・え・お」5つの母音を、口形を意識しながら明瞭に発音する。

・ メソッド文を暗記し、鏡に自分の顔を映しつつ、筋肉組織を意識しながら丁寧…。

* 「鼻濁音」の概念と、発音のためのトレーニング。

* 「自分の名前」を明瞭に発音する。

・ 母音を意識し、口形をきめる。

・ 子音を乗せ、リズムよく、ハリをもって発音。

⑤ 歌唱実践

- ・発声および歌唱の「型」を学ぶことで、声が出やすい身体作りをしていく。
- ・詩としての理解、言葉としての発音、声のコントロールを経て、表現にまで踏み込む。
- ・季節や行事を意識しながら選曲し、実践的な歌唱を。

* 詩の朗読

- ・日本語の特徴を理解し、語頭をたてて正しいイントネーションで発音。
- ・明瞭な発音を意識し、正しいイントネーションを体得。

* 声のトレーニング

- ・音声学的解説、声の健康について触れる。
- ・音域により、様々なヒントを与えつつ、実践的に声を磨いていく。
- ・プッシュ法、ふるるん発声、ターザン発声、ハミング唱法、掛け声キャッチボール、風船、音痴バケツ、ストロー、割り箸、ボール投げ etc.

* 楽曲に取り組む。

- ・音価、発想記号、強弱記号、テンポ記号、その他楽語および奏法の確認。
- ・言葉の入れ方。
- ・ブレス位置の確認。
- ・曲のスタイルや調子に合わせ、より美しく魅力的な作品となるよう陰影をつける。

* 音楽の背景

- ・作曲家・詩人の生い立ち、作品の背景、時代的な事物、雑学、逸話などに触れる。

以上①～⑤を、段階を踏み、習熟に応じて取り入れていく。

ヴォーカルレッスンの集大成としては、後期後半に「後期課題発表会（歌唱）」の機会を持ち、入室・挨拶・歌唱・退場までをひとつの流れとして行う。そこでは数十人の前に真正面から、まさに「空手」で立ち、緊張と戦いながら、自分の声だけで勝負しなくてはならない。歌唱能力云々というよりは、自立した「人間力」に勝るものが、良い結果を見せられるようだ。

なお、この場合は課題曲を設定し、5曲の中から各自が1曲を選択して事前に申請。当日はピアノ担当教員の伴奏によって歌うことができる。

以下に、課題曲選択の意図と、曲目を列記する。

〈課題曲選択の意図〉

- * 歌唱者の年齢、性別を選ばないこと。
- * メロディが印象的で親しみやすく、美しい、芸術作品であること。
- * 日本人の作曲家による、日本語の作品であること。
- * 詩が美しく、情感に富んでおり、平易にして理解しやすいこと。
- * 演奏時間が適当であること。
- * 音域が適当であること。

〈歌唱発表会用「課題曲」〉

- * 『七つの子』（野口雨情 作詞 / 本居長世 作曲）
- * 『めだかの学校』（茶木滋 作詞 / 中田喜直 作曲）
- * 『手のひらを太陽に』（やなせたかし 作詞 / いずみたく 作曲）
- * 『小さい秋みつけた』（サトウハチロー 作詞 / 中田喜直 作曲）
- * 『中国地方の子守唄』（日本民謡 / 山田耕筰 編作曲）

V 発展的取り組みに向けて

保育現場では、以上のピアノ、ヴォーカル両方のスキルを合わせて、さらに「弾き歌い」が必要になる。

座っただけで肺、および横隔膜の動きが制限され、声は出にくくなるし、加えてなお正確な打鍵動作も必要になる。それらを弾きながら歌う難しさを乗り越え、なおかつ、保育対象者への気配りや指導など、まさに八面六臂。指導者、エンターテイナー、プロデューサーといった役割を同時にこなし、いくつもの情報を処理・実行しなくてはならない。

しかし、1年間30回の授業で、その域に達することは到底不可能であり、学生たちも、自分たちの未熟さや様々なスキルの必要性によりやく気づき始めたところで、「必修授業」は終わってしまうのだ。

前述したように我々は最初から、「音楽Ⅱ」授業を視野に入れた取り組みを展開している。

「音楽Ⅱ」では、「音楽Ⅰ」で得た知識やスキルを踏まえ、以下の習得・体験を目標にしている。

- * 楽典、ソルフェージュ、音符の理解、リズムの理解
- * レパートリーの拡大
- * 音楽体験の充実

そのため、約 35 名の 1 クラスを 3 グループに分け、ピアノ練習・個人レッスン・ソルフェージュの 3 本柱による立体的な授業展開を行っている。このことにより、1 年次に詰め込んだ知識が「実践的な知識」として納得・理解され、力として蓄積されていくようだ。

また、学年末には「発表会」を開催する。メンバー構成、演奏手段、ジャンル、曲目などは教員と相談の上でエントリーし、「実力より少し背伸び」を合言葉に約半年を準備期間として行う。ここに至って初めて、自発的な意志による取り組みや努力が体现されるが、ここでももちろん、教員のプロフェッショナルな知識と技術によるサポートは不可欠である。指導はもちろん、技術に合わせた編曲や、時には共演してやることで、学生たちは「幸福な音楽体験」をすることにつながる。実際、発表会では達成感や充実感、時には悔しさから流される涙が多く見られ、それらは学生たちにとって、大変に特別な経験としてとらえられているようだ。

しかし、これらを経たからといって、学生たちが「音楽」を身につけられたかと言ったら、それは間違いである。これらは入り口に過ぎず、前述したように、ここから先にも継続的な努力を続けて行かなくてはならない。その先に終わりはない。

我々が「音楽」授業を開講して 4 年、今年度初めて就職試験に臨んだ学生たちがあったが、保育現場への就職を志した者の多くが、授業外の個人レッスンを希望したり、質問や相談をもって駆け込んで来たりした。その対応にあたりながら、我々は、「現場が求めるもの」と「養成機関が対応しているもの」との差を思い、忸怩たる思いにかられていた。彼ら自身も、今までの努力だけでは間に合わないことに気づき、煩悶していた。やはり、まる 2 年の音楽体験だけでは、物理的に時間が「不足」しているのだ。

幸いにも当大学においては、3 年後に「実践音楽」の開講が予定されている。これらは「音楽 I・II」を経て、努力の仕方、練習の習慣づけと継続の必要性を覚えた学生が対象であり、もちろん就職試験へ向けての具体的な指導も含め、より発展的な音楽表現スキルを身につけることを視野に入れている。

そこに至る学生たちは、すでに「努力すること自体」や、それがもたらす「結果」を喜びとして受け入れることができるようになってきているため、授業の効果はより高いであろうことを我々は期待している。

繰り返して言うが、何かを成すときに意識的な反復は不可欠であり、そこには忍耐と

向上心がないと継続は難しい。教育にあたる者は、スキルの伝達のみならず、このような心理面をサポートし、かつ、目標となる明確なビジョンを提供し続けられなくてはならない。つまりは教育者自身も、「音楽家＝人間」としての魅力を保持し、常に手本であり、尊敬される対象でなくてはならないのだ。我々は常にこれらを矜持とし、今後も授業にあたって行く。それこそが、音楽面のみならず、人間的なエネルギーにあふれた「魅力ある保育者」を育てることを疑わないからである。

Ⅲで触れたアンケートの設問中、「音楽は人生にとって必要か」との問いに対し、学生たちの多くは音楽を「人生にあって素敵なもの」として位置づけていた。音楽が、そのように常に憧れの対象であり、自己表現方法の一つとしてより豊かなものであることを、我々は願ってやまない。そのためにも、より効果的で前進的な授業展開を模索し、発展させていきたいと考えている。

またの発言機会には、より良い報告と、さらなる効果的な提案ができるよう、今後も研究を重ねて行きたい。